

こよひこそなみだの河にゐる千鳥なきてかへると君はしらすや

〔大和物語〕おなじ右のおほいどの定方藤原のみやすところ御仁善子帝おはしまさずなりて後、式部卿の宮于敦慶なんすみたてまつり給けるをいかありけんおはしまさざりける頃、齋宮の御もとより御文たてまつりたまへりけるに、みやすむところ宮のおはしまさぬ事など聞給うておくに、

まらやまにふりにし雪の跡たえていまはこし路の人もかよはず、どなんありける、御返あれど本になしとあり、かくて九の君の侍従の君にあはせ奉り給ひてけり、

〔十訓抄〕成明親王上村の位につかせ給ひたりけるに、女御あまたさぶらはせ給ひける中に、廣幡の御息所は、ことに御心ばせあるさまに御門もおぼしめしたり、

〔續世繼八源氏の御息所〕御門の御おほぢにはおはせねと、春宮親王實仁やみやたちの御母におはせしは、後三條院の女御にて、侍従の宰相基平の御むすめこそおはせしか、その宰相は小一條院の御子におはしき、その源氏のみやす所、御名は基子女御とぞ申し、

〔續世繼二玉章〕さてこの御時にみやす所はこれかれさだめられ給へりけれども、御をばの前齋院皇女篤子ぞ女御にまゐり給ひて中宮にたち給ひし、このほかの御よはひなれと、をさなくよりたぐひなくみとりたてまつらせ給て、たゞ四宮をとかや仰せられければにや侍けん、まゐらせ給ひけるよもいとわかぬ事にて、御車にもたてまつらざりければ、あか月ちかくなるまでぞ心もとなく侍ける、鳥羽の御母の女御とのもまゐり給ひて、院もてなし聞えさせ給へば、はなやかにおはしまし、かども、中宮はつきせぬ御心ざしになんきこえさせ給ひし、

〔十訓抄〕亭子院多に、御息所あまた御そうしして住たまふに、河原院の見所あるさまに、いとめでたくつくらせ給ひて、京極御息所原侍藤一とてころをのみ具し奉りて、わたらせ給ひけり、

稱侍御寢者爲御息所